

2022年6月5日聖霊降臨日説教

ヨエル書 3章 1-5節

使徒言行録 2章 1-11節

ヨハネによる福音書 20章 19-23節

本日は聖霊降臨日です。教会の誕生日と言われることもあります。わたしたちの東京聖三一教会は、この日を創立記念日としておりますので、今年は、1889年から数えて、133回目の教会の誕生日となります。

聖霊降臨日が教会の誕生日といわれるのは、本日読んでいただきました、「使徒言行録」の記述から来ています。「ルカによる福音書」と「使徒言行録」は、明らかに連続した文書と思われませんが、聖霊降臨という出来事は、その二つの文書のつながりの部分に位置しています。すなわち、復活したイエス様が天に昇られた後、残された使徒たちに聖霊が降り、教会として歩みが始まったということです。

「使徒言行録」にある聖霊降臨の出来事は、ほかの新約文書には描かれていません。本日朗読されました、「ヨハネによる福音書」20章19～23節の出来事も、聖霊降臨の出来事と言えますが、視点が異なります。そこには「その日、すなわち週の初めの日の夕方」（ヨハネ 20：19）とあり、イエス様の復活から三日目の出来事として記されています。エルサレムで起きたという点は共通していますが、場所はどこかの家の中です。時間も場所も、起きた出来事の内容もかなり異なります。その意味では、聖霊降臨の出来事がどのような出来事であったのか、そのことを客観的に確認することは困難です。しかし、本日は、「使徒言行録」の記述から、聖霊が降った意味を、学びたいと思います。

聖霊降臨日は、クリスマス、イースターと並ぶ、教会の三つの大きな祭り・礼拝の一つです。しかし、クリスマス、イースターと比べますと、知名度、注目度が低いといえるかもしれません。大きな祝日のイースターが終わったばかりだから、ということもあるかもしれませんが、やはり「聖霊」という言葉の概念が捉えにくいからだと思います。また「聖霊」が降って、すぐに使徒たちが色々な言語で話し出したという、本日の「使徒言行録」にある物語の不思議さも、関係しているといえます。

「聖霊」という言葉から考えてみますと、この言葉は、「三位一体」という言葉と同じくらい、捉えにくい概念です。「新約」における「聖霊」を、「旧約」の背景から簡単に言えば、主なる神様の「息」と説明できるのですが、それが降ったとはどういうことか、考えなければならないことはたくさんあります。ある台湾の神学者が、アジアのわたしたちにとって、聖霊とは「気」のようなものだと言っていました。確かに、「霊」ではなく、「気」と考えると、分かりやすいかもしれません。すなわち、「聖霊降臨」とは、イエス様の

昇天で動揺していた使徒たちが、主なる神様から、「聖なる」すべてののはじまりの「元（もとい）」になる「気」をもらって、「元気」に活動し始めた出来事である、と説明できるからです（同様に「悪霊」は、「悪い」「気」となります）。しかし、このように説明したとしても、「突然、激しい風が吹いて来るような音が天から聞こえ、彼らが座っていた家中に響いた。そして、炎のような舌が分かれ分かれに現れ、一人一人の上にとどまった」（使徒 2:2-3）という記述から受ける印象は異なります。それゆえに、たとえ「聖霊」の「霊」を「気」と置き換えて理解したとしても、実際、聖霊降臨の際に、何が起こったのかを知ることはできません。しかし、「使徒言行録」のこの記述は、「聖霊」の導きがなければ、使徒たちは歩み始めることができなかった、そのように告げていることは確かであると思います。

この「聖霊降臨」の出来事について、「使徒言行録」は、さらに、「すると、一同は聖霊に満たされ、“霊”が語らせるままに、ほかの国々の言葉で話した」（使徒 2:4）と記述しています。「聖霊」が降った後に、最初に使徒たちが行った活動は、いろいろな言語で話し始めるということでした。ここにある「話し出した」の「話す」は、論理的に何かを「語る」という意味ではなく、日常会話の「話す」という意味です。しかし、「霊が語らせるままに」の「語らせる」という言葉が、日常会話とは異なり、「（公に）発言させる」というような意味があります。それらを合わせ考えますと、使徒たちは、「聖霊」に力を与えられて、堂々と何かを普通に話し始めたと、ここは説明しています。そして、語っているのは、皆ガリラヤ人なのに、なぜか各地方の言葉が聞こえたことと記し、その地方の一覧が続いています。

このお話も不思議です。ただし、「使徒言行録」の著者は、「聖餐式聖書日課」には省かれています。このお話の最後を「あの人たちは、新しいぶどう酒に酔っているのだ」（使徒 2:13）という冷ややかな批判の言葉で結んでいます。そのことから考えますと、著者自身も、この出来事は不思議に思われて当然、と考えていたと言えます。

さて、この色々な言語で話し始めたということですが、確かに一瞬にして別な言語を習得するというのは、まさに奇跡です。『聖書』にある奇跡物語を、あまり合理的に判断してはいけないと思いますが、わたしは、次のようなことではないかと想像します。それは、集まった使徒たちは、ガリラヤの人と書かれています。周囲には様々な地域から集まったユダヤ人がいたと思います。それゆえ、使徒たちは、何かを天から受けたことを感じ、これから一緒に歩いていく喜びを伝えようとして、自分の母国語や今話している言語だけで伝えるのではなく、色々な言語で伝えようとした。いろいろな地域から集まっているからこそ、「あなたの知っている言語では、『嬉しい』とは何て言いますか？」という極めて短い言葉から始めて、とにかく喜びを伝えようとした。それが重なりあい、つながりあい、様々な言語で語り、さらにもう少し詳しく伝えるようになり、その喜びの伝達という現象が、喜びであ

るがゆえに、一気に広がった。そのような出来事だったのではないかと想像するのです。

先に述べた通り、聖霊降臨の出来事がどのようなことであったかを、客観的に確認にすることはできません。しかし、「使徒言行録」の著者は、地中海世界という一つの多様な文化が混ざり合う世界の中で、使徒たちは、主なる神様から与えられた自分たちの喜びを、言語の違いを超えても伝えようとした。それだけの熱意と喜びが彼らの中に存在した。そのように伝えていることは確かであると思います。

「使徒言行録」が書かれたのは、教会が地中海世界の中で活動を本格的に始めた、1世紀末から2世紀初頭であり、同時にローマ帝国による教会への迫害も始まった時でした。それは、教会が困難な出来事に本格的に直面し始めた時、未来が予想できないまま歩まなければならなかった時でした。しかし、そのような中で、「使徒言行録」にある聖霊降臨の記述は、教会とは、人の思いによる集まりではない、教会とは、「聖霊」が降った出来事から始まった、主なる神様が呼ばれた人々の集まりである。最初の使徒たちも、不安や絶望にあったが、「聖霊」によって喜びの力を得た。だから、今、教会に連なるわたしたちも、「聖霊」に満たされ、喜びに満たされ歩みましょうと励ましているのだと思います。

わたしたちの東京聖三一教会も、この「使徒言行録」で励まされている「教会」の一つです。今地上に存在するすべての教会も同じです。それゆえに、ここから学ぶことも同じです。この地上にいろいろなことがあっても、教会は、聖霊によって、喜びに満ちた歩みを行うことができるということです。この世界に希望を伝えることができるということです。3年に及ぶコロナ禍もあり、世界情勢も不安しかかないような現代です。しかし、教会は、聖霊が降るからこそ、ひとつの教会の中で喜びに満ちた歩みを共にすることができるのです。またまた多くの教会どうしが、喜びに満ちた歩みを共にすることができるのです。

先週、日本聖公会第67(定期)総会がありました。日本聖公会自体の課題、また日本聖公会が取り組まなければならない課題は、数多くあります。人間的な思いでは、乗り越えられないかもしれないと思うものも多くありますが、わたしたちは、自分たちの力だけで何かを行うものではありません。聖霊の導きに励まされて何かを行います。そうであるからこそ、不安や困難を乗り越えられるのです。「使徒言行録」が記された後始まった、長い迫害の時代を、教会に呼び集められた人々は、聖霊に満たされて、喜びを通して乗り越えました。わたしたちも、今の時代を直視しつつも、わたしたちの教会を通して、喜びに満ちた、わたしたちの教会独自の様々な活動をしたいと思います。そして、その歩みを通して使徒たちと同じように「元気」に、主なる神様が下さる「喜び」を、世界に伝えていきたいと思います。